

書評

『キリスト教と戦争』

石川明人 著 中公新書
2016年1月発行、256ページ

香川 孝三

キリスト教は「愛と平和」を説きながら、なぜクリスチャンは戦争をするのか。イエス・キリストが死亡してからおよそ2000年たつが、クリスチャンは世界中で戦争を続け、人を殺している。もちろんクリスチャンだけが戦争をしているわけではないが、戦争している人々の中にクリスチャンが含まれていたし、今も含まれていることは事実である。戦争は罪深き行為の集大成であって、国際共生が前提とする平和とは対極にある事態である。「愛と平和」と戦争は矛盾している。なぜ矛盾したことをクリスチャンは行ってきたのか。聖書によれば、右の頬を打たれたら左の頬を向けるという絶対的平和主義・非暴力主義の考えを取らなければならないはずである。しかし、実際はそうになっていない。そうするとクリスチャンは聖書の内容と実際にやっていることが違うという批判が出てくる。

歴史を見ても、初期キリスト教の時代には異教徒との戦闘があり、それがなければクリスチャンは生き延びていなかったであろうし、キリスト教が体制側の宗教となった後には、異教徒を迫害し、戦争によって獲得した領土を支配して、占領地から富を搾取して勢力を拡大してきた。著者はアウグスティヌスやルターなどの神学者の言葉からクリスチャンがどのようにして武力行使を正当化したかを整理しているが、それらが精神の呵責を感じることなくクリスチャンを戦争に駆り立てたことが分かる。キリスト教が真理であったからキリスト教が世界に広まったと考えるクリスチャンがおれば、それは「ナイーブというよりむしろ傲慢」(本書136頁)な人である。キリスト教信仰にもとづく絶対平和主義者は少数派であり、キリスト教主流派は条件付きで戦争を肯定している。核兵器保有も認めている。これを聖書の中のどの聖句からどう正当化してきているのであろうか。個人の生活レベルの倫理問題に終わらせないで、聖書をもとに政治・社会問題にどう切り込むかを考えるとき、その格好のテーマが戦争の問題である。

本書ではアメリカやヨーロッパのキリスト教の文献が

主に取り上げられているが、その中で日本キリスト教徒と戦争の問題が第6章であつかわれている。これは日本クリスチャンのアジア太平洋戦争中の戦争協力行為に対する戦争責任の問題とつながってくる。日本のキリスト教の諸団体は、アジア太平洋戦争への協力行為を反省し謝罪を示してきたが、著者はその内容は「総じて乏しい」という評価を下している。これは戦争責任が十分に果たされていないという評価につながってくる。著者の説明では、個々のクリスチャンの対応は様々であり、「大東亜戦争」を正しい戦争とみるクリスチャンもいるし、断固戦争に反対するクリスチャンもいる。福音の宣教のみに専念すべきであり、政治や社会の具体的な問題には係わるべきではないというクリスチャンもいる。「これが戦争に対するキリスト教の立場です」と言えるようなものを示せない状態にあることを述べている。これは日本のクリスチャンが戦争責任をあいまいな状態にしてきたことを意味する。「日本のクリスチャンよ、お前もか」という感想を抱かざるを得ない。

本書の最後には、キリスト教と戦争を議論する際には、「人間の根本的な矛盾と限界を認め、受け入れることから始めなければならない」と述べている。聖書を理想の世界を述べているのに対して、世俗界にいる人間のやることはそれとは切り離して理解しようという立場に見える。政教分離にはさまざまな形態があり、日本のような完全分離型だけでなく、融合型も見られる。融合型はキリスト教徒が多数を占めている国にも見られる。その場合こそキリスト教が政治に大きな影響を与えており、戦争を俗世界の問題として切り離せられない。クリスチャンは聖書の内容を実践するのであれば、戦争撲滅を積極的に実践していくべきである。本書は国際共生におけるキリスト教の役割を考察するための素材が多く含まれており、参考となる本であろう。



→ Continued from page 3

- Curry, C., Trew, H., & Hunter, J. (1994). The effect of life domains on girls' possible selves. *Adolescence*, 29 (113), 133-145.
- Freeman, M., Hennessy, E., & Marzullo, D. (2001). Defensive Evaluation of Antismoking Messages Among college-Age Smokers: The Role of Possible Selves. *Health Psychology*, 20 (6), 424-433.
- Kanno, Y. (2003). *Negotiating bilingual and bicultural identities: Japanese returnees betwixt two worlds*. Mahwah, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- Kanno, Y. & Norton, B. (2003). Imagined communities and educational possibilities: Introduction. *Journal of Language, Identity, and Education*.
- Markus, H. & Nurius, P. (1986). Possible selves. *American*

Psychologist, 41 (9) 954-969.

- Oyserman, D. & Markus, H. (1990). Possible Selves and Delinquency. *Journal of Personality and Social Psychology*, 59 (1) 112-125.
- Pavlenko, A., & Norton, B. (2007). Imagined communities, identity, and English language teaching. In J. Cummins & C. Davison (Eds.) (pp. 669-680). *International handbook of English language teaching*. Springer.
- Wenger, E. (1998). *Communities of practice: Learning, meaning, and identity*. New York: NY: Cambridge University Press.
- Williams, M. & Burden, R.L. (1997). *Psychology for Language Teachers: A Social Constructivist Approach*. Cambridge: Cambridge University Press.